

応しているような気配を覚えた。閉じた眼のうらには開いた眼には映らない色彩があふれていた。手というアンテナは、光という力のなかに宇宙からの声を捉えているのに、意識も言葉もまったく無力で、それが何であるのか語れないでいた。光の泡は爆弾でもあった。じわじわと、透明な波がおしよせて来て、手を刺激し、手も、必死で、思考の壁を超えてでも、手の声で語ろうとしていた。X氏の思考はその特異点に衝突して、もう1歩も進めない地点まで来ていた。

光が音をたてている。光の声をききたい。いや、光という音信を知りたい。眼が、手が、足が、光の音信を聴きとる力を発揮してほしい。時は今だ。光だけが、どこから来てどこへいくのかという疑問に答える力をもっているような気がする。X氏は、光に感応した。光の波にのって、宇宙のリズムとなり、どこまでも漂っていくと、たったひとつのことがわかれると思う。一切を犠牲にして、すべてを棄て、そのことを知りたい。

眼を殺し、耳を殺し、手を殺し、心臓を叩き割っても、たったひとつのことがわかれば文句はないと思った。

長い間、光を浴びていた。自然に、身体が動きを求めた。眼をあけて、もう一度、砂漠のようにうねった砂の塊りを視た。頭は空っぽになっている。全身に、光の音が沁みているみたいだ。妙な力があふれている。

X氏は、雨傘をもって立ちあがり、ゆっくりと歩きはじめた。

夏の陽は西に傾いていたが、力はまったく衰えず、燃え盛っていた。無数の光の独楽が中空に廻っているためか、時空が膨張して、歪んでいるように見えた。

X氏は、自分の部屋がある方向にねらいをつけて、歩きはじめたが、どこを、どう歩いているのかわからない状態がしばらく続いた。

ふと気がつくと、X氏は、アスファルト道路にひかれた白線の左側を正確に歩いていた。無意識のうちに、X氏の足は、白線を踏むのを避けているのだった。足は、あきらかに何か畏れていた。白線は、どこまでものびている。

妙な気がした。この道は、1回も通ったことがないのに、いつも通いなれているあの道よりもよく知っているのだ。奇妙だ。確かに陽盛りのこの道を自分は知っている。歩いている自分の姿も見ることがある。そうだ、白線の左側を、ゆっくりと夏の光を浴びながら、歩いている光景は、何千回も視た。

X氏は、過去を想いだすのではなく、未来を想いだしているような気がした。

意識が泡立った。足の裏がひりひりする。ものの強度がぐんぐん強くなった。樹木も、石も、草も、家々も、堂々と存在している。もちろん、白線は燃えあがるようにその存在の強度をつよくしていた。どこにでもある、ありふれた白線だった。白線がX氏を呪縛しているのだ。とにかく、絶対に、その白線を踏んではいけない。跨いではいけない。どこまでも白線の左側を歩くこと、それ